

松尾光のキューバ右往左往 ①

日本語、日本文化講座開設

夢は日本に留学させること

キューバへ行こう

私とキューバとのつながりは、ハバナ大学で日本語を教わった父の生徒達に会った20数年前にさかのぼる。彼らと何度か会ううちにキューバの人達の、貧しいけれど真摯な姿、ゆったりとした暮らし、20年以上も父を慕う人間の絆の強さはどこからくるのだろうかと考えるようになった。

定年後に新たな挑戦をと考えた時、キューバの人たちのことが頭をよぎり「キューバへ行こう」と思い立った。思い立って1年半で実現できた。2016年9月から3年間国際交流基金の支援を得て活動する。

サンクティ・スピリトゥスにて

行先はキューバの地方都市のサンクティ・スピリトゥス。ハバナから東へ390kmほどの内陸都市。この地でのプロジェクトが決まるまで、キューバ人、日本人とのいくつかの運命的な出会いがあった。

サンクティ・スピリトゥスは街ができて502年だ。旧市街は復元し整備されている。観光資源はカソリック教会と歴史を感じるヤヤボ橋ぐらいで少ないが、ここにサンクティスピリトゥス県の県庁があるので、ハバナに行かなくてもたいいていのことは用がすむ。

日本語を教える

プロジェクトの内容は日本語、日本文化講座開設だ。サンクティ・スピリトゥス大学と「グアイアベラの家」の2箇所で行う。10万人の都市で日本人は私ひとり。週5時間の講座を行い、3年間で日常の日本語が読み書きレベルになることを目標にしている。3年後に何人か日本政府の支援で留学させることが夢だ。

学習者は総勢40名。開講は「グアイアベラの家」が9月でサンクティ・スピリトゥス大学が10月。4月から4か月かけてようやくアウトラインが決まった。

主体組織グアイアベラの家とは

グアイアベラとは、キューバの民族服でラウルカスト



サンクティ・スピリトゥス ヤヤボ橋

ロも公式行事で着ている。グアイアベラを展示する博物館が「グアイアベラの家」だ。この博物館は音楽イベント、美術展示、カルチャーイベントが主な活動だ。

屋外ステージしかない場所にテレビや世界で活躍する音楽家が演奏しにくる。日本語講座は、今までのイベントとは異質のカルチャースクールだ。

共催のサンクティ・スピリトゥス大学

ハバナ大学が東大とすれば、ここは地方の国立大学だ。人文学部があり教員養成講座もある。教員は8割が女性で和気あいあいの雰囲気がある。学生はまだわずかしか会っていないが、おとなしく真面目そうだ。

4月からの準備・国際交流基金とアカデミックビザ

活動資金は日本の国際交流基金の支援に頼る。5月初めに正式内定を得た。でも支援実施は8月末。それまでの費用は自費で賄った。一方、私の活動はキューバ政府が出すアカデミックビザに裏付けされる。

トラベルビザで行き、1か月滞在でビザが書き替わる予定だったが、結局3か月まち続けた。キューバへ行かれた方はわかると思うが、キューバでは手続きが信じられないくらいのおんびりしている。仕事の進み方は、日本企業感覚の10倍ぐらいの時間をかかると思ったほうがよい。

トラベルビザ期限の数日前にすべてクリアになった。少し遅れると不法滞在になる綱渡りだ。それまで表立った活動はできなかった。



サンクティ・スピリトゥス カソリック教会



大学の学部幹部の方と私



日本語を学ぶオタクSSの人たち。私は右端

課外活動で歌う子供達のピアノ伴奏をしたり、音楽やクラシックバレエイベントを見学したりするぐらいだ。ようやく7月に動き出した。

9月からの活動内容

一時帰国の数日前に活動予定案ができた。

1. 大学と「グアイアベラの家」の指導で、8月30日から9月6日まで生徒募集する。
2. 大学では2016年9月6日から、準備を続け、2016年10月に日本語と日本文化コースがスタートする予定だ。4時半過ぎに開始で一週間5時間の講座を3回に分けて行う。
3. 「グアイアベラの家」は、曜日をかえて大学と同じ講座を行う。
4. 一方「グアイアベラの家」では、オタクSSやサンテイスピリトス県の文化庁と芸術庁が中心となって日本のサブカルチャーを愛好する活動がある。もりだくさんの予定だ。私もできるかぎり支援の予定だ。

主な項目は以下の通り。

1. 着物、浴衣、装飾品の着付けとデモンストレーション。
2. 盆栽の展示会と盆栽の作り方ワークショップ。
3. 茶道の実演と茶道で使う道具の出品。
4. 居合道、武道のデモンストレーション。
5. 折り紙展示会と折り方のワークショップ。
6. 日本映画祭。写真展。
7. 子供たちと若者たちによる日本の歌とキューバ音楽のコンサート。松尾光先生がピアノ演奏する。私の趣味を活用する。
8. 日本文学のワークショップ。俳句、短歌、日本文学の話など。
9. 書道の実演のワークショップ。

これらのイベントはスペイン語で行われる。指導の日本人はいない。予定をたてただけで実際の活動これからだ。

アメリカとの国交回復の影響

米国の経済封鎖は解かれておらず、国交回復して1年たつが、人々の経済生活はほとんど変わらない。成長率1%で経済の苦境はつづく。一般の人は1カ月の消費は100ドル以内ではないかと思う。

旅行者は兌換ペソを使うが、一般は人民ペソを使う。価値は24倍の開きがある。私は人民ペソで生活している。店で買える品物は中国製だけで品揃えはない。社会主義国家の不便さで、買い物は大変だ。

経済封鎖がとけて企業が進出すれば変わると思うが、数年はかかるのではないか。不便な生活だが、格差がなく治安がよく、明るく穏やかな生活は変わっていない。

国交回復でも変わらない生活

1. キューバの人はものを捨てない。古着屋、古道具屋は街中にあふれて、10年20年と使い続ける。たとえばテレビは、ほとんど20年前ぐらいのブラウン管テレビ。
2. 店が混んでいると中に入れない。炎天下の道でじっと待つ。携帯費用やインターネット接続のプリペイドカード購入は、いつも15分以上汗だくでドアの外で待つ。新しいものを買うことはとても大変。日本では10分で済む買い物も、おそらく10倍の待ち時間を覚悟しないとイケない。
3. 品揃えが無いので、街でみる普段着や靴は、みな似たものを着ている。しゃれたカジュアルなスタイルの人はほとんど旅行者だ。
4. 移動も大変。列車は50年ぐらい前の貨物車の様な車両で、安いが遅く乗り心地は不明。少し高価だが時間に正確な高速バスがあるが1日2本で、発車の1時間前

に手続きしなければならない。乗車手続きが、信じられないが30分ぐらいかかる。街中は馬車、人力自転車が主流で、高くても最大1回乗車400円ぐらい。

一方、旅行者は一般の交通機関は使わず、冷房付きレンタカー、タクシー、専用バスで日本の料金とあまり変わらない。あつと言う間に1万円使ってしまう。

5. 車が少ないので道はガラガラで、空も真っ青。国道は整備されている。自家用車を持てば天国と思う。新車はほとんど中国製で高級車が現代自動車。日本の半額ぐらい。でも持てる人は100人に1人いるかいないかではないか。私の知人では、ハバナ在住のキューバ人が1人だけ新車に乗っていた。

6. キューバの人の自宅は、大学教授でも博物館館長でもあまりかわらず質素。冷房は10%以下と思う。男は大部分、家でくつろぐときは上半身裸。

7. でも最近金持ちで大きな家に住む人が出てきた。どのような仕事が聞きたかったがスペイン語で聞けずこれから調べる。

8. 安倍首相が9月ハバナへ来る。日本企業の進出があるのか。これから格差社会になってしまうのか。

国交回復後に旅行者は激増、観光事業がヒートアップ

一方、アメリカのクルーズ船の寄港などで旅行者は激増している。日本人は倍々で増えて今年は2万人突破らしい。年齢層は定年後の世代が主流。全体をみればカナダ人、欧米人、ロシア人が多く、これにアメリカ人が加わった。

夏は暑くオフシーズンなのだが、今年は関係なく旅行者が国中にあふれている。観光に絡む人は羽振りがいい。

エピソード

1. ハバナでは大型ホテルの建築ラッシュ。街を歩くと工事の音が絶えることがない。

2. 3月にオバマ大統領が来たので、通る道は突貫工事で整備した。とてもきれいだ。一方、路地はゆっくり整備中。道は掘り起こされている。

3. 旅行に関する業務は、一部自営が許されて羽振りがいい。高収入が期待できる。

4. 私の知人でハバナ大学の外国学部の出身者の何人かは旅行ガイドになった。ハバナ大学の外国学部は優秀で、卒業すれば各国語を流暢に話せる。大学の教職をなげうってでもガイドに転身している。エリートの就職先の1つになっているのかも。

ガイドは、とても忙しい毎日のようだ。私はいつもキューバの人へおごってばかりだったのだが、ガイドになったキューバの人に、旅行者用のレストランで初めてお

ごってもらった。

5. サンクティ・スピリトゥスではホテル建設までいかず、自宅を改築して民宿にすることが加速している。欧米人がどんどん泊まりくる。去年泊まった民宿の主人は羽振りがよく、新車のバイクに乗っていた。

6. サンクティ・スピリトゥスではドイツ人の医学、薬学の交換留学生がおり、ドイツ人観光客が多い。私が宿泊している民宿にも欧米人が泊まりくる。陽気なフランス人と仲良くなり、国柄が感じられておもしろかった。残念ながら、サンクティ・スピリトゥスで日本人観光客とはだれも会わなかった。おそらく団体行動なので、街をぶらつく余裕がないのだろう。

以上、観光事業で街が整備されてゆく流れが全土で広がっているようだ。それ以外の産業の様子は残念だがわからない。9月から40人の学習者と接するので仕事のことや生活のことを聞いてみたい。

まつお あきら

日本経済新聞社でIT技術者として30年近く勤務。2016年3月に退社後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から25年前に父親の松尾威哉さんがハバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。

詳細は本紙21号(2016・4・4発行)11ページの

BOOK『キューバの光と影 — ボランティア日本語教師三年の記録』参照



10月22日(土)のキューバ友好フォーラム(表紙の案内参照)の会場で1728円(税込)を特別価格1300円(税込)で販売します。ぜひご利用ください。

BOOK 『キューバ医療の現場を見る』

キューバ友好円卓会議編/同時代社 1600円+税

本書は、2008年3月の円卓会議主催のキューバ医療ツアーの現地報告を中心に、医療制度や医療支援の現状がまとめられている。執筆者は、総勢35人からなる訪問団の中の8人の医療関係者によるもの。

キューバの医療・保健は、地域の住民が利用できる身近なコミュニティから地区へと繋がる合理的なシステムが構築されているばかりか、それを支える人的な資源にも恵まれており、優れて機能的と思われる。

精神医療においても、精神障害者を入院病棟ではなく、地域の保健センターを多数作って、出来るだけ入院をさせない方針で、地域ケアに力を入れている。少しでも多くの方に、キューバの医療、教育に目を向けてもらいたい。

